

現在、公開中の新作「ミツバチの羽音と地球の回転」が、自主上映会を中心にヒットを続けています。東日本大震災で、原子力発電所の安全性への関心が高まり、地味なドキュメンタリー映画ながら、観客動員数が増えているそうですね？

おかげさまで、全国で自主上映会やトークイベントに呼んでいただいたり、外国メディアから取材の依頼があったり、忙しい日々を送っています。私は、「反原発派」と見られてしまうことが多いですが、自分では「正論派」だと考えています。

この映画は、瀬戸内海の祝島を舞台に進行する中国電力の「上関原発建設計画」に28年間反対し続けている地元の人たちの意思や、スウェーデンでエネルギーが地域単位で循環する仕組みづくりを目指す人たちの実績や取り組みにスポットを当てました。なにより、反原発派の皆さんばかりでなく、一般の観客が増えていくことはうれしい限りです。

映画の中では、推進派と反対派が町を二分する対立を続ける状況が描かれています。中国電力は、原子炉の設置許可を受ける前に、山口県知事から建設予定地の埋め立てが許可されたという話は、本当ですか？  
はい。山口県でも大半の人たちは無関心なので、県外の人たちが知らないのはなおさらです。

## 核燃料サイクルと高速増殖炉は硬直したエネルギー政策の象徴

鎌仲ひとみ ●映画監督、ジャーナリスト

原発の周辺には、人間の心のありように影響を及ぼす問題もある。核と人間を扱ったドキュメンタリー作品を通じて、「日本社会は、真つ当な議論を始めるべき」と訴え続ける映像作家に話を聞いた。



かまなか・ひとみ/1958年、富山県生まれ。大学卒業と同時に、ドキュメンタリー番組の製作現場へ。カナダ国立映画製作所を経て、米国に滞在。95年から、活動の拠点を日本に移す。気鋭の映像作家として世界中を歩く。

映画には、海上封鎖する祝島の島民に中国電力の社員が船の上から拡声器で呼びかけるシーンがあります。それが、両者の初めての対話でした。傍聴を望む島民たちが町議会から締め出されるなど、硬直的な状態が続いています。推進派と反対派は真つ当な議論をすべきなのですが、なかなかそこまでたどり着きません。

鎌仲さんは、これまで「ヒバクシャ―世界の終わりに―」で、劣化ウラン弾によって対外被爆と内部被曝が進む実態を描きました。「六ヶ所村プンディー」では、日常に放射能汚染が入り込む現実や国策の核燃料サイクル計画が孕む問題を取り上げました。原発以外の原子力問題については、どう考えていますか？

やはり、すべてはエネルギー政策全体の問題であり、「持続可能なエネルギー政策になっていきますか？」というところに尽きます。日本の場合は、ものすごく硬直しているのです。

米国は、核弾頭の数を2万5000発から8000発まで減らしました。その点では、日本よりも先行しているといえます。そんな米国も、厄介な危険物質のプルトニウムの扱いには手を焼いています。

「ヒバクシャ」で取り上げた米国のハンフォード核施設は、第2次世界大戦時のマンハッタン計画で原子爆弾を開発・製造するためにプルトニウムを精製する場所でした。米国でさえ、放射性廃棄物による環境汚染という、現在でも残る「負の遺産」の問題が解決していません。

にもかかわらず、日本では、青森県六ヶ所村で、日常的な環境汚染や被曝を伴う国策の核燃料サイクル計画が進められています。

なぜ日本は、すでに破綻を来している核燃料サイクル計画のために、わざわざ大金を投じて六ヶ所村の再処理工場をプルトニウムを製造する必要があるのでしょうか。40年前は、未来の高速増殖炉計画に沿って発電する構想が意味を持っていたかもしれませんが、今では先進国の多くが計画を断念しています。日本だけが世界の流れに逆行しているのです。